

印刷業界の新技术情報を三美印刷がお届けするメールニュース

sanbi-i-com (No.157)

ユニバーサルデザイン (4)

文字サイズとフォント

色弱者に配慮した「色」の使い方だけでなく、高齢者等に配慮した「文字」の使い方もユニバーサルデザイン(UD)の重要な要素です。

1. 高齢化社会からの要請

人は高齢になれば、個人差はありますが、様々な要因で視力が衰えてきます。視力が落ちれば、当然ながら文字の判別が難しくなってきます。

一方、日本の65歳以上の高齢者は増加の一途をたどっており、内閣府発表の統計によれば、2015年には3,392万人、比率では26.7%に達しました。過去の数字を見てみますと、25年前の1990年の比率は半分以下の12.1%、さらに25年前の1965年はわずか6.3%でした。高齢者比率の増加に伴い、日本人の平

均年齢も右肩上がりに上昇しましたので、(日本人全体の視力の統計データは見当たりませんが)一般的な印刷物の読者の平均視力は昔よりも低下していると推測できます。

高齢化は今後も続くと予想されていますので、視力の低下を完全に防ぐことができる何らかのブレークスルーでもない限り、平均視力はさらに低下し、文字への配慮の重要性はますます高まっていくと思われます。

2. 文字サイズ

文字を判別しやすく、読みやすくするための配慮としては以下が挙げられますが、このうち最も効果的なのは、何といても①の文字サイズです。

- ①文字サイズをできるだけ大きくする
- ②行間、字間、余白に余裕を持たせる
- ③見やすく、読みやすいフォントを使う

※以下、文字サイズは全てポイント(pt と略)で表しますが、念のため×1.4112でQ(=級)に換算した値も示しておきます。

- ・8 pt ≒ 11.29 Q
- ・11 pt ≒ 15.52 Q
- ・12 pt ≒ 16.93 Q
- ・14 pt ≒ 19.76 Q
- ・22 pt ≒ 31.05 Q

それでは、どのくらいのサイズにすればよいのでしょうか? 『メディア・ユニバーサルデザイン —みんな

に優しい情報制作のガイドライン—』(著者:全国印刷工業組合連合会、監修:メディア・ユニバーサル・デザイン協会、2009年発行)という本の38ページに、「A4サイズの印刷物の場合、12 pt以上が適正とされています。高齢者の利用が多い場合は14 pt以上が望ましく、弱視の人などには拡大印刷したものを用意しましょう」とありますので、**12 pt がひとつの目安になっています。**

ちなみにこのsanbi-i-comの本文は11 ptですので、上記の目安に足りていません。弁明いたしますと、sanbi-i-comは印刷して文字サイズを紙上に固定した状態で配布している訳ではなく、PDFをwebに掲示しているものですので、文字の見た目のサイズは画面上でいくらでも拡大できます。なお、拡大印刷したい場合は、手元に保存してAdobe Reader等から行うことをお勧めいたします(ブラウザから印刷するよりも、その方が拡大の設定が簡単です)。原寸はA4

ですが、B4(倍率 1.22)に拡大印刷すれば 11 pt は約 13.4 pt の大きくなり、A3(倍率 1.41)ならば約 15.5 pt の大きくなります。

「12 pt では、そんなに大きいとは言えない」「私が知っている大活字本の文字はもっと大きいぞ」と思われた方もいらっしゃると思います。その通りで、例えば大活字文化普及協会のホームページで紹介されている「大活字文庫」シリーズは 22 pt、「オンデマンドブックス」シリーズは 19 pt, 22 pt, 26 pt から選択可能となっています。なぜこんなに大きいのかと言うと、「22 pt あれば弱視者がルーペなしでも読める」という考えに基づいているようです。

以下に 8, 11, 12, 14, 22 pt の文字(フォントは MS P 明朝と MS P ゴシック)を並べてみます。

- 8 pt: 文字サイズ
- 8 pt: 文字サイズ
- 11 pt: 文字サイズ
- 11 pt: 文字サイズ
- 12 pt: 文字サイズ

3. フォントの基本 —明朝体とゴシック体—

前項③の「見やすく、読みやすいフォントを使う」については、まず基本として、明朝体とゴシック体の使い分けがあります。

常識かもしれませんが、一般に、小説などの長文の読みやすさ、疲れにくさ(可読性)では明朝体が良いとされているものの、文字の構成要素の視認のしやすさ(視認性)や他の文字との区別のしやすさ(判読性)ではゴシック体が良いとされています。明朝体は線が細すぎて、眼との距離を離していくと、ゴシックよりも読み取りにくくなります(前項の 8~22 pt の文字を並べてある所で試してみてください)。

前項でご紹介した本『メディア・ユニバーサルデザイン —みんなに優しい情報制作のガイドライン—』も、ゴシック系のフォントのみで書かれており、明朝体は使われていません。

- 12 pt: 文字サイズ
- 14 pt: 文字サイズ
- 14 pt: 文字サイズ
- 22 pt: 文字サイズ
- 22 pt: 文字サイズ

見ての通り、文字を大きくすると見やすくなることは明白ですが、大きな文字には、「1ページに収められる文字数が減る」⇒「ページ数が増える」⇒「コストの増加」につながるというデメリットもあります。大活字本には分冊ものが多く、一冊で済んでいた従来本よりも割高なのも、文字サイズが原因です。

無理して行間、字間、余白を詰めれば、ページ数の増加を多少は抑えられますが、それをやると、折角の文字サイズ拡大で得た見やすさがかなり損なわれることとなります。文字サイズと行間・字間・余白の設定に当たっては、コストへの影響が大きいページ数とのバランスをどのあたりで取るか、という問題が付いて回ることにご注意ください。

これは特にパワーポイント等でプレゼン資料を作ったことのある人には重々体感済みのことかと思えます。プロジェクターで投影するプレゼン資料は、遠くからでも読めるように、視認性、判読性の良いゴシック系のフォントをできるだけ大きな pt 数で使うのが原則であり、明朝体は全く向いていません。

プレゼン資料作りは、ゴシック系で文字を大きくする、色を使う場合は色弱者に配慮する、などを通じて UD を実践する好機であるとも言えます。

今回は、UD の視点から開発されたフォントである UD フォントについてご紹介する予定です。

(第 157回: 2017 年 4 月 24 日)